

私の抵抗



堀 合 文 子

が、その“新しさ”というものに私は最近、一つの抵抗を感じている。

勿論その新しさは一つの意見であり、一つの方向である。

或る時はそのすばらしい新しさのその中にとびこんだ。私はその新しさにおどろき、また、あわてた。その瞬間、実にその新しさからほど遠い私が見じめになり、すっかり自信を失ってしまった。(今更この年になつて自信を失うなんておかしい位……)

が、その晩、一晩いや数日考えた。何ゆゑあのような事をするのか。どこに根拠があるのか。なぜあの方針をとるのか、と。

しかしこれは即ちその主旨方針で、その点をよく理解できた。次に、私のしている事とどこが違うか、どう違うか、考えてみた。そして比較してみた。

一応こうして考えてみると、反省も、また、疑問も与えてくれた。

次に幼児に実際やってみた。

これで、私の疑問も自分なりの解決が一度できた。

新しい学説なり主張なり理論なりが出る
と、私共は新しさに酔つてそれに夢中になつてとびつき、それをしないとまるで研究のたりぬ勉強なものにかたづけしてしまうが、一応とびついてもよい、しかし私共一日を幼児と共に生活する者は、画家を育てる専門教育でもなく、舞踊家を育てる専門教育でもなく、幼児の平均な成長発達をねがつて幼児をみつめ、幼児と生活しているのであるから、成長・発達のためには、新しさもよくかみくだいて自分の幼児の適材適所に取り入れるべきであると。大きい紙に画くのがよいから大きい紙ばかりに、色の紙に画くのがよいから常に色の紙に、自由な表現が大切だからとやたらに音楽だけ与えて自由に自由にと、かたよつた取り入れ方はどうであろう。

年令が小さいのに体にあわぬ大きい紙を

“新しい”というものは、よいものだ。物であろうが、意見であろうが、魅力のあるものだ。何かそこから希望が湧いてくるようだ。

幼児教育にもつねに何かの新しさが加えられている。私も年を重ねるにしたがい

“新しさ”を求める事に努力してきた。

与え、その画面を処理できぬものに何でも大きいものを与えても、幼児には迷惑なこと。そこには、たのしみもよろこびも興味もわかない。大筋肉の活動なら、他の活動でもおきなうことができる。

年令の小さい時は処理できる大きさの紙で、そして発達にしたがいその変化をもたせてこそ、その伸張は大きいのではないだろうか。

今までも、目に見えた目新しいことはしてないが、幼児の成長発達を考えて、どの幼児も伸張するように、時期を得て、適材を与えていた事には変らなく、その「新しい」ことも当然折り込んでいたことになる。むしろ、その方がナチュラルではなかったろうか。

この事によって、私は「新しい」、反面に「ふるい」という事に対して抵抗を感じてしまった。「なんだ今までしてきたこと

のほうか、幼児に対してはずっと考えてやっていたのだ。ふるいという評もうけるが「新しい」ということも勿論実際していたことで、目新しく極端に抽出しなかっただけだ」と、かたづけしてしまうこともできる。が、この新しさに遭遇することによって自信が持てたことは感謝することだった。

幼稚園の教師はつねに新しさを求めなければいけない。しかし、その新しさにぶつかった時、そのまま夢中になって取り入れたのでなく、先ず自分の幼児を考え、幼児にはどのような時期にどのように与えるのが適当かを必ず考えねばならない。そして前のよさも共に加えつつ新しさに進むことこそ幼児教育の望むところではなからうか。

むやみと流行のようにその波にのることは、幼児の為に一応、反省しなくてはならないのではないか。特色をもって、専門的

に研究している所はまたちがう。が、私共普通の幼児教育をする時には、幼児の将来を考え、幼児の生活全体をながめながら「新しき」を取り入れることを忘れてはならない。

また、ふるきにひたる事も用心しなければならぬ。

教師はたくさん新しさを吸収しなければならぬが、幼児にはそのまま全部与えるのではなく、適当に、適材を与えていくことが教師の技術であろう。

また常に新しさを求め、学んでいくことは教師の忘れてはならないことだろう。

「新しい」「ふるい」の間に立った私の抵抗の一こま。

*

*

*

*

*